
三木原ちさについて

優美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三木原ちさとについて

【Nコード】

N7590S

【作者名】

優美

【あらすじ】

合唱サークルに所属していた女子ふたりがお互いのことを気にする話。

語り手…片山由里（sp）

対象…三木原ちさと（sp）

落ちるまで（前書き）

未完です。続きもまだ一文字たりとも書いていません。更新は遅いと思います。

でもいつか終わらせられたらいいなと思っています。

思っているだけでどうなるかわかりません。頑張る気持ちだけはあります。

落ちるまで

これからわたしはあるひとりの友人について書こうと思う。わたしたちは大学生で、合唱サークルを通じて知り合った。年齢は一緒の同級生である。わたしの名前は片山由理、彼女の名前は三木原ちさとと言う。

合唱サークルに所属していたもののわたしも三木原も歌はうまくならなかった。入った当初と比べれば、まあ、多少、合唱の声の出し方はましになったかと思うが、それでもカラオケなどでは最初から歌がうまかった人間には敵わない。だからわたしも三木原もサークル連中と行くカラオケを嫌悪している。歌が好きな人間は歌がうまいことが多い。わたしと三木原は例外だった。わたしはアルトの音型が歌えないからという理由でソプラノパートを歌い、三木原も同じような理由でソプラノだった。わたしは地声が高めだが、三木原は決してそんなことはないのに。それでも裏声で歌えば地声がいくら低かろうとそれなりの高さの声は出るものだが、三木原は結局最後まで裏声を習得しなかった。代わりに地声がどんどん高くなっていた。人間むりやり頑張れば地声の高さが変えられるのだということをわたしは二十年生きてきて始めて知った。

三木原は努力家である自分をアピールしたがっている怠け者だった。本当は努力家ではなかった。わたしは根っからの努力家であったので三木原のそんな態度が気に入らないこともあったが、サークルを引退した今となってはもはやどうでもよくなっていた。三木原は大学生活で得た大切な友人の一人だった。もっと言えば、各所で共通点のようなものが見いだせるわたしの半身みたいなものであっ

た。わたしは時に三木原を憎み、時に愛した。尊敬したり蔑んだり肯定したり否定したりした。三木原と付き合ってみてわかったことは、人間は自分と同じような人間を許せないものであるということと、絶対的に言葉が通じない人種がいるということであった。それでもわたしは三木原のことが好きなきもあつた。嫌いなときもあつたが、本当にどうしようもなく好きなきもあつたのだ。現時点ではかわいさ余つて憎さ百倍と言うべきか、わたしは三木原のことがそれなりに嫌いである。思い出すと心臓のあたりがむかむかしてくる。それでもわたしが今こうしていらしながら三木原のことを思い出しているのは、やはり三木原のどこかに惹かれる部分があるからなのであろう。三木原は魅力的な子だった。容姿もさながら、危なっかしさと隣り合わせの無邪気さと、かと思えば計算尽くの発言が見え隠れする間抜けなところ、大人のような子どものような曖昧な発想、そして何より目の前の人間に集中して向き合えるところがわたしは好きだった。それでもわたしが三木原のことを嫌いになったのは、あまりに自分勝手すぎるからであらう。いや、自分勝手というのは違う。三木原は誰よりもひとのことを考えていたし、逆にそれ以上のことは考えられなかった。ひとのことを考える自分のことを考えることは不可能で、そしてひとのことを考えるひとのことを考えることは不可能だった。三木原はこの大学に入ったのだろうからさすがに絶望的に頭が悪いことはないと思うが、対人関係の面でとびぬけて不器用だった。それでも三木原のまわりの人間は三木原のことを愛した。不器用なところもひっくるめて愛した。悲劇的なのは、三木原が周囲に愛されていることを三木原が気づかなかつたことと、それを好ましく思わない人間もまた周囲にいたことである。好ましく思わない人間だってはじめのうちは三木原を愛していたのだ。それなのに三木原はいつも通りの空気の読めなさでそいつの好意をスルーし、結局嫌われた。わたしは三木原のとなりで好意が憎悪に変化する瞬間を目撃して、ああなるほどと思って眺めていた。わたしは三木原の他のどんな相談でも受け付けたが、その

点に関して三木原に助言することはなかった。理由はかんたん、三木原が器用になってしまったら、サークル内恋愛の競争率が上がるからである。三木原は不器用なままでいい。そしてわたしは、ひつついてくる三木原を主に邪険に扱い、気が向いたときだけ愛であれば良いのだ。なんておいしいポジションなのだろう。

三木原とわたしは、親友ではなかった。わたしは友達としてのあ
る一線を三木原が決して乗り越えてこないように、いくらか本心を
ごまかすことがあった。ひとのことを自分の物差しでしか考えられ
ない三木原は最初こそ無邪気に話しかけてきたが、出会って二ヶ月
ほどしたあたりから、わたしのことを怖い、よくわからないと面と
向かって言うようになった。失礼な話である。わたしは一目見たと
きから三木原に惹かれていた。同時に一目見たときから、三木原の
ことが嫌いだった。明るく振る舞おうとして震える指先、突然話し
かけると上ずった声で対応するところなど、大嫌いだった。初めは
嫌悪の割合が強く、三木原がとんでもなくかよく見えていたので、
三木原に近づいてしまったらわたしは三木原に意地悪してしまうか
もしれなかった。そうなるのは嫌だったので、意図的に距離を置い
た。遠くからだ、三木原のことがよく見えた。好意には鈍感だが
敵意には敏感な三木原。まっすぐ見つめられるといつも伏し目にな
る。作り笑いではないぎこちない笑顔。語尾にいつも弱気な声音を
にじませる。いじめられっこだ、と思った。小中高の学校生活の中
で、こいつに友達と呼べる存在はいたのだろうか、妙な好奇心が
うずいた。しかし、はじめのうち周囲は三木原に対してやたら好意
的だった。わたしは驚いた。いじめられっこがいじめられない空間
そんなものがあるのだと興味深く思った。三木原が周りから見放さ
れたら、わたしが優しい顔をして救いの手を伸ばしてやろうと思っ
ていたのに、三木原はいともたやすく周囲にとけ込んだ。同様にわ
たしも三木原と同様の恩恵を受け、サークルに馴染んでいった。腑
に落ちない点でもあり、有り難かった点でもあった。わたしは三木
原と比べればうまくやっている方だと思うが、それでも、人見知り

であったのだ。

三木原の美しさに、最初はなかなか気づくことができなかった。三木原が夏に同じサークルの男と付き合いだしてから、わたしは三木原の容姿を注意深く見つめるようになった。わたしはまあまあ男性に人気のある方だったので、なぜその男がわたしではなくあえてこの三木原を選んだのが不思議でならなかったのだ。三木原は思っていた以上に肌の色が白く、そして耳朵の色が赤かった。腰まで伸びる黒髪はゆるくウェーブを描いており、聞けば地毛だと言う。化粧気のない顔だったが、唇はいつもきれいなピンク色をしていた。長い下睫で瞳のふちが黒く、そして白目は澄んでいた。ふむ、と思った。三木原の随所にいじめられっこオーラが見え隠れしていたことから内心で三木原のことを自分より下に位置づけていたわたしだったが、わたしよりはやくに男を捕まえたことでわたしの三木原に對する見方が変化した。三木原は脅威になりうるかもしれない。

前記したようにわたしは人見知りだった。その変わり、優しいふり、明るいふり、人間に興味があるふりならいくらでもできた。それが我が家の教育方針だった。人前では良い子にすると楽だわよ。目の前の人の様子を見て、大人しくしたり、社交的になったりしなさい。母親はよく小さなころのわたしにそう説いた。彼女もまた極度の人見知りだった。自分をさらけ出すことを極端に恐れていた。母親が二十何年生きてきて身につけた処世術が人前で演技をすることだったのだろう。小さなわたしはそれをコピーするように求められた。母親の後ろに隠れると、母親はわたしを叱った。人前ではにこにこしていなさい。ある時は大人ぶることを求められ、そのまま大人ぶるのを継続していたら、もっと子どもらしくしなさいと叱られた。医療機関にいるときは大人が要求された。しかし治療が終了すると、医師の前で母親は、わたしにおもちゃをほしがって駄々をこねるような子どもらしさを求めたのだ。わたしは母親の笑顔が見たかったので、諦めなかった。その時々状況にあわせて全力で演技をした。母親は喜んだが、しかし小学校低学年まで進んだとき、

わたしはクラスメイトから否定されることになる。先生の前の由理ちゃんは不自然。そのころにはもう、猫を被ること、空気を読んで喜怒哀楽を表出することはわたしの一部になっていた。わたしにとって自然なことだった。だから、不自然という言葉は衝撃だった。どうすればいいのかわからなくなった。以降、大人の前の自分自身とクラスメイトという時の自分自身のすりあわせ作業が始まった。クラスメイトだけの教室というわたしが唯一演技をせず自然な状態でいられた場所は、泡のように消えてなくなってしまった。虚構で塗り固めた日々が始まる。自分の中にふと浮上してくるむなしい気持ちさえ無視すれば、生活は快適だった。友達はたくさんできたし男の子にだって告白された。しかし友達だとか恋人だとか、わたしのことを好きになってくれたひとは、わたしの本質的な部分を何も知らなかったのだ。演じているわたしを気に入ってくれたにすぎなかった。はじめわたしは、猫を被り行動する自分自身のことも、自分自身だと思っていた。内面のことをろくに考えず、結果ばかりを目で追った。しかしやがて限界が来た。実家という逃げ場があったころはよかった。一步家の中に入れば、わたしは無だった。両親は距離を取りながらもわたしの性質を理解してくれていたし、兄はわたしに近寄ろうとしなかった。兄妹なのにわたしたちは赤の他人のようにすごしていた。わたしは誰ともほとんど喋らず、本を読み音楽を聴き、ときどき外の皮をひっぱってメールだの電話だのを友達に発信したが、基本的には受け身だった。出されたものを食べ、連れ出されるところへ行った。場所が変わっても家族という間だけは、わたしはひたすらに自分を表現することを拒んだ。そんなふうだったから結局いつまで経っても人見知りを克服できなかった。

だからわたしは、三木原に対していらいらしたのだろう。人見知りです、とストレートに態度に出す分かりやすい三木原。周囲はそれに気を配った。三木原を受け入れるために三木原を中心に置いた。わたしもまた三木原の傍らで三木原を気遣う一員に、すっかりと仕立て上げられていた。それに自覚したとき、三木原への嫉妬はより

強く濃くなっていた。他者への警戒心を見せながらそれでも許されてちやほやされる三木原。わたしが必死で隠し続けてきたわたし。誰からも受け入れられることのなかったわたしによく似た存在が目の前にいて、受け入れられていく様を見せ付けられるのは、正直きつかった。加えて三木原は男のひとから好かれている。わたしが嫌悪したわたしが誰かに求められている。それは不思議な感じがした。わたしは三木原を注目した。三木原に近づくひとのパターン。三木原が拒むパターン、受け入れるパターン。わたしは三木原の恋愛模様をぶち壊したくてたまらなかった。

そのはずだったのだ。

そう、三木原の恋愛を壊したい、その一心のはずだったのに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7590s/>

三木原ちさとについて

2011年10月9日01時03分発行